

---

# 天狗の調べ唄

杏仁豆腐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天狗の調べ唄

### 【Nコード】

N3911B

### 【作者名】

杏仁豆腐

### 【あらすじ】

世は天保。花のお江戸に現れる数々の異物。そして、白髪赤目の叶韻キョウイン法師。江戸を舞台に妖しい物語が幕開ける。

## 第一見聞：似非法師

それは江戸のどこか。花のお江戸で繰り広げられる奇怪な世話物でございます。

濃い春の香りに目を細め、叶韻きよついでん法師はお猪口を呷った。持参した膳の上には冷えきった徳利と、つまみの山菜。またそれの上には桜の花びらが一枚二枚と、我が物顔で陣取っている。

さて今宵、天保の夜更け。一人風流な夜桜見物中のこの白髪がふつさりと生えた法師様、実はこの桜の木の下に妖怪やら、ばけものが出るという退治しに来たのである。

だが、せっかく綺麗な夜桜なのだからと酒を片手に叶韻はやってきた。僧侶としての規律を無視しているのに彼には全く気にする素振りはなく、また一杯冷や酒に舌鼓をうつ。

「ちよいとそのお坊さま」

突然、桜の木の陰から甲高い声がした。叶韻が視線を花びらからそちらへと向けると、真っ赤な小袖を着た女の童が立っている。

月明かりにぼんやりと照らし出された童の顔は、そういう事に無関心な叶韻が見てもわかるように美しい。

叶韻はまたもや酒を呷り、そんな事を思いつつ腰を上げた。

「はい、何の御用ですか」

「お坊さまを食らいたいのです。食らわせていただけますか」

童は恥ずかしそうに言い、叶韻はやれやれと真っ白な頭を掻いた。やはり、噂通りであったのだ。このやけに美しい桜を見に来た武士たちが、美しい童の妖怪に食われて死んだという。そして、その噂に釣られてやって来た叶韻と同じような法師たちも食われたようだ。妖怪の霊力があからさまにおかしい。

「ほう、わしが嫌だと申したらどういたしますのかな？」

言いながら地に転がっていた錫杖を掴んだ。しゃらんと錫の音が鳴り、童の妖怪は眉を顰める。

「無理にでも、食らうか？」

今までうつすらとしか開けられていなかった叶韻の赤い瞳が、ふと開かれ、妖怪を捕えた。普段は暖かな灯りを持つ瞳は、今は冷たくもなく暖かくもないぬるま湯的な灯りを持っていた。

妖怪は何も言わず、右手を空に掲げる。

すると、どうしたことだろう。ちらちらと舞っていた桜の花びらたちがピタリと止まり、妖怪が掲げた右手を叶韻に向かって振り下ろした途端に、それは猛吹雪の如く叶韻に振りかかった。

「嫌とは言わせない」

桜の花びらの中で、叫ぶように妖怪が言った。

叶韻は錫杖を地に突き立て、靡く袖を抑える。舞い上がる花びらに頬を切り裂かれ、流れる鮮血をそのままに叶韻も叫び返した。

「お主が何人の人を食らったかは聞かんでおくが、何故妖怪になったのかは知りたい！」

童はびくりと肩を震わせ、次は左手を上げた。すると、瞬く間に叶韻を襲っていた花びらは消え、童は地面にへたり込んだ。

「寂しい、寂しい、寂しい寂しい寂しいよ、おつかあ……」

しゃくり上げる童を見、叶韻は錫杖を手に童の前に座る。

「寂しいから人を食らったのか？」

童は叶韻の問いかけに小さく頷いた。

「お主、名はなんと申す」

「……お菊」

「ではお菊。妖怪から人の御魂に戻る事は出来ぬ。それに、妖怪が退治される時は苦痛が伴う」

苦痛と聞き、童　お菊は恐怖と怒りを含んだ目で、叶韻を見上げた。

「まあ、さて。話は最後まで聞いておくれ。苦痛が伴うのは退治される時のみ。わしがお菊の妖怪の部分のみを食らえばいい」

「妖怪の部分だけを？そんな事が出来るのですか？」

「言いきれないが、寂しいのは無くなる」

叶韻は微笑み、お菊の手をとる。小さく冷たい手は、叶韻の大きく暖かな手に包まれた。

「しばし目を瞑っていてくれませぬかな。わしは、食らっている姿がよろしくない」

お菊は素直に目を瞑り、叶韻はソツと空いた手で暗闇に手招きをする。

何拍かの間が空き、暗闇から何かが近ずいて来た。金色の瞳が闇にぼつかりと浮かび上がり、素早くお菊に飛び掛る。

「成仏してくれよ」

お菊の手を離して、お菊が暗闇から現れたものに食われるのを見ながら、叶韻は心情掴めぬ顔で言った。

「不味い」

お菊を食らったそれは不服そうに言う。

月に照らされたそれは黒猫だった。暗闇をそのまま映し出したような毛に、金色の鋭い瞳。長い尻尾の先は二股に分かれており、首元には白と紫の数珠が巻かれている。

「そんなに怒るな、時長。可愛い顔が台無しだぞ」

「……叶韻様、そんな事を言ってもわたくしは怒りますよ。このよ  
うな悪役を毎回させられては、いくらわたくしでも我慢できません」  
喋るその猫、時長はふんと鼻を鳴らして、花びらがついていない  
桜の木を見上げた。

「あの小娘も桜に魅せられていたのでしょうか」

「さあなあ……わしは酒が飲めれば枯れ木でも構わん」

「左様で」

無表情のこの一人と一匹は今一度木を一見し、その場を後にした。



## 第二見聞：岩魚坊主

「時長」

「なんでございましょう」

「暇だ」

「左様ですか」

先ほどからこの会話、何度となく行われただろうか。

はてさて、今回猫又の時長と、生臭坊主の叶韻は吉原の遊郭におりました。

叶韻は馴染みの遊女に酒を注がせながらも、暇だ暇だと呟いた。

「もう。叶韻様はいつも失礼な人ね。私がせつかくお相手をしているのに。ねえ、時長」

「はい、わたくしもそう思います」

遊女と猫に言われ、叶韻は顔をしかめる。この女とは長い付き合いで、時長が妖怪であることも知っている。だから気がねなく、くつろげるのだが少々口煩かった。

「わしは色恋に興味はない」

「若い人が何を言いますか。叶韻様も色恋の一つや二つ」

「およし、酒」

空になった徳利を遊女 およしに押し付け、叶韻は畳に寝そべった。畳特有の青い匂いが鼻孔をくすぐり、夏の照りつく陽射しが心地よい。風鈴がそよ風に吹かれてチリンと、美しい音色を奏でる。

「はいはい」

およしは呆れたように徳利を持って立ち上がり、襖の向こうに向かって行った。どんなに無愛想な男でも、客は客なのだ。

叶韻は開けられた障子の向こう、空を見上げて雲の流れを見つめていた。眩しいまでの蒼に、ぼつぼつと揺れる白。瞼が少しづつ、

下がってくる。

そのまま、幾分たつただろう。叶韻の臉はすっかり閉じられ、酒を持ってきたおよしはため息をついた。

毎度のことなのだが、彼がどうして酒をたらふく飲むだけなのか、およしには到底理解出来ない。高い金を払って何もせずにくーすか寝る客は、およしの知る限りではこの叶韻だけだった。

そして、白髪に赤目の遊郭に入り浸る僧も、およしの知る限り叶韻ただ一人。普通ではないその容姿は遊女の間では有名であるし、叶韻の訳のわからぬ行動も有名だ。

訳のわからない行動の一つに叶韻が遊郭に来た男を、見るも無惨なほど殴ったというものがある。同心に理由を尋ねられた叶韻は、けろりとこう答えた。

「これがおよしを殴ったから」

そう、実は殴られた男は前日およしを殴ったのだった。どこからかそれ聞いた叶韻が、男を戒めたのだが突然、男が殴りかかってきたらしい。

そこで叶韻は躊躇うことなく、手に持った錫杖で男をボコボコにしたのだとか。

叶韻はそれからというものの、毎度およしを買い、愚痴や世間話を話せと促した。それがこの男のいい所でもあり、理解しがたい所なのだ。

「……叶韻様」

およしは酒を畳の上に置き、寝息をたてる叶韻を優しく揺する。

叶韻はふうと息を溢しただけで起きる気配はなく、およしはまたため息をついた。

「およし殿」

「ひあ!？」

誰もいないと思っていたのに、背後から話しかけられておよしは飛び上がる。後ろを振り返ると時長が大層面白そうに、尻尾を振って座っていた。

「叶韻様は眠ってしまいましたか」

「え、ええ」

忙しく鳴る心臓を抑え、およしは頷く。

「このお方はいつも無理をなさる。昨日もそうでした」

「何かあったの？」

時長はいいと短く返事をし、しばらく考えて口を開いた。

「昨日、叶韻様は岩魚釣りに出掛けたのです」

「まあ！お坊さまは生臭物を食すのはいけないんでしょう？」

「叶韻様が戒律を守らぬのは今に始まった事ではございません。：

…とにかく、叶韻様は主を釣ると意気込んで川へ向かいました」

蒸し暑いその日の朝方、叶韻は法衣に釣竿という何とも滑稽な姿で山を登り、谷川まで来てやっと竿を振るった。

溪流はさすがによく澄んでおり、時長は冷たく美味しいその水を一口、口に含む。すうつと喉が潤い、時長は満足気に喉を鳴らした。

「ほら、時長。おまえも猫ならば口で魚を捕まえてみる」

釣糸を垂らして叶韻が言う。ひどく真面目な顔で言われ、時長は困惑した。

いくら自分が妖怪とはいえ、川に飛び込んで溺れでもしたら

……

うんうん唸って悩む時長を後目に、叶韻は口元を綻ばせる。

「冗談だ」

「なに？冗談ですと？」

「ああ、冗談だ」

叶韻は大声で笑い、時長は悪気なく笑う叶韻を見て、怒りを通り越して呆れた。まったくもって予測のできない人間である。

「叶韻様、お戯れはお止してください」

「ああ、すまんすまん。つい暇で」

釣りをしているのに暇なのかと、時長は問おうとしたが止めておいた。この人に十ものを訊いても、一返ってくるかこないかだから。「その法師殿。ここは神聖なる川にて、釣りをしてはなりません」  
ちようどその時、山道から一人の坊主がやって来た。

叶韻は素直にその言葉を聞き入れて釣糸を川から引き上げると、坊主に話しかけられた。

「もし、法師殿が川で身の丈二尺超える岩魚を釣っても、それは逃してください。川の主ゆえ」

「わかりました。ああ、お主も飯を食いませぬか？教えてくれた礼です」

叶韻が時長に包みを持ってくるように促し、時長は猫らしく叶韻に向かってにやあと鳴く。

時長が包みを銜えて坊主に近ずくと、坊主はあからさまに嫌そうな顔をした。

「これ、時長。いけませんよ」

叶韻が敬語や改まった喋り方をしている時は、何かしら相手を油断させるための時だ。時長はさっさと包みを叶韻の足元に置き、坊主を見つめる。

「さあ、お食ってください」

「おお、ありがとうございます」

坊主は嬉しそうに包みに入っていた握り飯を食し、また山道へと消えていった。

「叶韻様……」

「さ、釣りをしようか」

叶韻はさっさと釣糸を垂らし、何か物言いたげな時長を見遣る。

「あれは岩魚坊主だったな」

「気づいておられたのに、どうして逃がしたのですか？」

しばし叶韻は糸の先をじいっと見つめて、額に汗が滲んできた頃に口を開いた。

「こういうことだ！」

竿が大きく撓る。大物がかかったのだ。

叶韻は今まで岩場に腰を下ろしていたが立ち上がり、力一杯に竿を振り上げた。

ざばあと水しぶきが陽の光に照らされ、次に巨大な魚影が空に飛ぶ。身の丈二尺はあろうその巨体は立派なもので、この川の主と思われる。

「主が釣れた」

「ええ、主ですな」

「腕が筋肉痛になりそうだな」

「でしょうね」

必死にばたつく巨大な岩魚を見ながら二人は顔を合わせて笑った。この岩魚が先ほどの坊主だったのだ。

時長が話し終わり、およしは着物の袖で口元を軽く押さえた。

正直言っただ驚いた。時長がこうやって喋ることも驚いたが、今ぐつすりと無防備に眠りこけている男が岩魚の主を騙し捕るなんて。

「どうしてそれがそのお坊さんだなんてわかるの？ そのお坊さんは普通の人だったのよね」

「ああ、それなら簡単なことですよ。叶韻様やわたくしなんかは、相手の霊力の質を見極めて判断しますがね、その岩魚の腹の中に米がしこたま入っていたのです」

叶韻が坊主に振る舞った握り飯が、岩魚の腹から出てきてそこで確実に確信したのだ。

「じゃあ、叶韻様は初めからお坊さんが岩魚だと思っていたってこと？」

「でしょうね。まあ、主の噂を聞いていたようですが」

部屋の中は静まりかえった。外で蝉が鳴く音と風鈴の音色以外、何も聞こえない。

およしは黙り込み、妖怪というのは案外身近な存在なのだと思

った。時長はといえば盛大な欠伸をして、開いた障子から 二階の高さから飛び下りた。

軟らかいにくきゅうのお陰で難なく着地し、何もなかったかのようにならませる。

時長を目だけで見送り、およしは弾かれたように立ち上がった。

「あらやだ、お酒がぬるくなっちゃう」

急いで確かめた徳利は持ってきた時より格段にぬるくなっており、今年の夏の暑さをおよしは今更ながらも思い出す。

「……およし……」

仰向けに眠っていた叶韻が、おもむろに呟いた。

およしは、はいと返事をしたが反応はない。

「なんだ、ただの寝言かあ」

もつっとおよしは笑い、ぬるくなった酒を手に一階へと向かった。

およしが出ていって数拍後、叶韻はもう一度呟く。

「……およし、好きだ……」

叶韻の声は風鈴と蝉の音に混じり、消えた。

昔々、いりくんだ山の奥。澄んだ溪流には巨大な岩魚がおりました。その岩魚はお坊さんに化け、釣り人に話しかけて長話に興じまして、その後この辺りは寺の土地だから釣りはしないようにと注意します。

しかし、釣り人はお坊さんに食事を振る舞い、お坊さんが上機嫌で帰っていった後にまた、釣りを再開しました。

そうして釣れたのは巨大な岩魚。釣り人は魚を家に持ち帰り、捌いて驚いた。なんとまあ、岩魚の腹からあのお坊さんに振る舞った食事が出てきたのです。

やあ、あのお坊さんは岩魚だったのかと釣り人は感慨に浸った

とか。浸らなかったとか。

これにて天狗の調べ唄、第二見聞幕引きでございませ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3911b/>

---

天狗の調べ唄

2010年10月13日21時57分発行